
国語科における ICT を活用した授業の特性と課題

— 「国語科教育実習」 事後指導での模擬授業を通じて —

都築 則幸

1 はじめに

次期学習指導要領では ICT を活用することによって指導の効果を高めることが求められている。しかし、国語科教育の現場においては、未だにその導入にあたってのメリットやデメリットを共有するに至っていない現状がある。そこで、本稿では ICT の活用を前提とした模擬授業の状況を見ていくことで、国語科教育に ICT を導入することのメリットとデメリットについて、その一端を明らかにしていくことにしたい。

2 ICT を活用した模擬授業を行うにあたっての事前指導

模擬授業を行うにあたっては、「国語科教育実習」の事後指導の一部として、授業を履修している大学4年生に ICT の活用を前提とした模擬授業を構想してもらうことにした。ただし、受講者に実習先で ICT を活用した授業を行った者はいなかったため、こちらが準備したソフトウェアについて、その基本操作を指導し、その後グループごとに ICT を活用した授業の構想と学習指導案の作成のための時間を設けた。以下に準備したソフトウェアとハードウェアを示すことにする。

【ソフトウェア】

- ・ 中学校国語科デジタル教科書（東京書籍『新編 新しい国語 2』平成 28～31 年度用）
- ・ 授業支援ソフト（ロイロノート・スクール）

【ハードウェア】

- ・ プロジェクター、スクリーン

（各自のスマートフォンからミラーリングできるよう Apple TV や Miracast も準備した）

ハードウェアに関しては、多くの学校で電子黒板やタブレット端末の導入が急がれているが、まだまだ未整備の部分が多い。そして、それは大学の教職課程でも同様である。そこで、今回は学生のスマートフォンを活用することに同意してもらい、一人一台タブレット端末を持っているという条件で模擬授業を行うことにした。

また、今回準備した授業支援ソフト「ロイロノート・スクール」は写真や動画、PDFなどを資料にして生徒に配付できるソフトになっている。また、生徒も同様の作業ができるので、生徒のプレゼンテーションや協働学習にも活用でき、さらに教師が生徒から回答を集め、その回答を生徒と共有したり、回答同士を比

較するということが「ロイロノート・スクール」では可能である。このような授業支援ソフトを用いて国語科の授業を行えば、以下のメリットが生じると考えられる。

- ① 従来、プリントを用いた授業であれば、その配付にも時間を要するが、タブレット端末を通じてデータをやりとりしたり、スクリーンに投影することで、その時間を大幅に短縮することができる。
- ② 生徒個々にプリントのデータをストックさせることで、例えば教師が漢字の書き取りの度にプリントを印刷するのではなく、各自の理解度に応じて、タブレット上で書き取りの練習をするといった活用方法も可能である。また、プリントを紛失したことで生徒の学習が妨げられるといったことにもデータのストックはメリットがある。
- ③ 教師の質問に対して、生徒全員から回答を求めることができるため、生徒の理解の状況をリアルタイムで把握することができたり、より多くの生徒の意見を得ることができるようになる。
- ④ 生徒の作文を共有したい場合、従来の授業では教師がコピーをしたり、文章をプリントに打ち直す必要があったが、作文用紙をカメラで写し、そのデータを共有することで、タイムラグをなくし、教師の労力を減らすことができる。
- ⑤ プレゼンテーションの資料を班ごとに作成させる場合においても、紙媒体であれば班のメンバーで下書きしたものを模造紙などに清書し直すといった作業が生じるが、「ロイロノート・スクール」であれば、それぞれが作成した資料を集めて組み合わせることで、プレゼンテーション資料を作ることが可能である。そのため清書の時間を取らずに、より調査や内容の見直しに時間をかけることができる。

⑤の内容などは、パワーポイントなどでも代用できる事柄であると考えられるが、学習内容に応じてソフトを使い分けるとするのは、学年が低くなればなるほど、その煩雑さが学習者にとって大きな負担になると考えられる。やはり①～⑤の内容を一つのソフトで賄うことができるというのは大きなメリットである。タブレット端末を積極的に活用していくのであれば、「ロイロノート・スクール」のような授業支援ソフトの導入が現実的であると言える。そこで今回の模擬授業でも授業支援ソフトを使えるようにした。

3 模擬授業の概要

今回の模擬授業では、デジタル教科書や授業支援ソフトを活用した授業を構想することを求めたが、実際に指導案を提出させたところ、デジタル教科書の活用を中心にしたものは見られなかった。学生にデジタル教科書を使わなかった理由に関して尋ねたところ、あえてデジタル教科書を使うメリットを感じなかったというのが大半であった。デジタル教科書には本文を読み上げる機能や、補充資料をスクリーンに投影することで国語便覧の内容を代用させることができるといった学習支援機能が備わっている。しかし、自分の授業に合わせてデジタル教材を作ることのできる授業支援ソフトと比較すると、汎用性という点では見劣りする。従来から教科書にワークシートや資料プリントを組み合わせる授業を行っている教師は多いが、そういった授業のイメージでICTを関連付けていくとなると、授業支援ソフトでデジタル教材を作成し、その教材を活用する授業の方が学生にとってはICTを活用した授業として構想しやすかったと言える。

今回、各グループが構想した授業は以下の通りである。

Aグループ：『枕草子』を通して、自身の季節感を養おう 中学2年

Bグループ：ヴァーチャル日本語 役割語の謎 中学1年

Cグループ：俳句を学ぼう 中学3年

Dグループ：大根は大きな根？ 中学1年

模擬授業はA～Dの順番で行った。模擬授業を行うグループはグループの中から教師役の学生を選び、50分の授業を行うことにした。また、教師役以外の学生は生徒役とし、模擬授業の後、参加者全員で研究協議を行った。本稿ではAグループの模擬授業について、その概要を示すことにする。

【資料1】

中学2年 国語科学習指導案

平成29年11月17日(金)5時間目

Aグループ

1：単元名 『枕草子』を通して、自身の季節感を養おう。

2：単元の指導目標

- ・『枕草子』を音読して、大まかな内容をとらえる。
- ・清少納言の季節感を掴み、それを参考に自分なりの季節感を養う。

3：単元の評価基準

関心・意欲・態度	書くこと	読むこと	伝統的な言語文化と 国語の特質に関する事項
・古文の内容に関心をもち、作品に描かれている情景や筆者の季節感を考えようとしている。	・他の生徒の意見も参考にしながら自身の季節感を表す文章が書ける。	・学習を通して、清少納言の季節感や平安時代に生きた人間の感性を読み取ることができる。	・『枕草子』特有の表現を味わい、古典に親しもうとしている。 ・文語表現を通し、筆者の心情を考え、時代による言葉の変化を考えることができる。

4：単元の指導計画と評価計画（3時間扱い）※本時は○で囲んでいる

次	時	学習活動	主な評価
1	1	・音読を通して『枕草子』の内容を確認する。 ・『枕草子』の文学的価値について学習する。	関/読/伝
	2	・筆者が季節ごとのよさを捉えている情景描写に注視して読み、筆者の心情理解を深める。	関/読/伝
2	①	・現代版『枕草子』を作成し、自身の季節感を養う。	関/書/伝

5：指導にあたって

(1) 教材観 『枕草子』は平安期の貴族の生活や価値観を後世に伝える資料として重要であり、特に本単元で扱う「春はあけぼの」の巻は当時の季節感と現在の季節感とを比較し、考えるという点で適

した教材であると言える。

- (2) 生徒観 現代生活において、古代ほど季節の移り変わりに注意を払う必要はなくなってきたとはいえ、現代の中学生の四季の移り変わりを感じ取る鋭い感性は失われていないと考える。しかしながら、自身の感じたこと、考えたことを文章化することについては苦手意識を感じている生徒が多数である。
- (3) 指導観 本単元では『枕草子』『春はあけぼの』を読むことを通して、清少納言の季節感を掴むとともに、自身の季節感を養うにあたって、次の事項に配慮する。①本文の内容を大まかに把握するため本文全体を通読し、漢字や語句を確かめる活動を行う。②内容理解をより深めるため『枕草子』の文学的価値について学習を行う。③情景描写や心情を表す語句に注目させ、筆者の感性や心情理解を深める。④『枕草子』『春はあけぼの』を参考に自身の季節感を文章で表現する。これら4点に配慮し、単なる作品理解に止まらず、生徒の季節感を養うとともに、自身の身の回りの物事もよく観察し、イメージ豊かに表現する力を養うようにしていきたい。

6：本時の指導計画（3時間中3時間目）

(1) 指導目標

- ・自分なりの季節感を出す文章を書き、相互評価を通して視野を広げる。

(2) 指導計画

学習活動	指導上の留意点
<p>1</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本時の学習課題を確認する。 自分流の『枕草子』を作ろう。 ・「春」のキーワードを考え、ロイロノートを用いてクラスで意見を共有する。 ・クラスから出た意見を参考に、教師が例文を作成し、どのような文を作成すればよいのかを確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・本時の学習課題を提示し、学習課題を確認できるようにする。 ・ロイロノートの使い方を改めて説明し、学習が滞りなく進むようにする。 ・古文の言葉を中心にしたものは勿論、現代の言葉を用いたものも作成することで、自由に表現してよいのだということを確認させる。
<p>2</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「夏」のキーワードを新たに考え、例文を参考に自分流の現代版『枕草子』を作成する。 【予想される生徒の反応】 ・キーワードを考え、一人で作品を作り上げることができる。 ・キーワードを考え、他の生徒と協力して作品を作り上げることができる。 ・キーワードが思いつかず、他の生徒と協力することもできない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・個別学習ではあるものの、グループの形を取り、文章作成に行き詰まったら周囲に気軽に相談ができるようにする。 ・キーワードも思いつかず、他の生徒に協力を求めることができない生徒がいた場合は、個別に声をかけ、学習を支援する。 <p>【評価基準】</p> <p>B → A</p> <ul style="list-style-type: none"> ・キーワードを考え、それを基に、自分の季節感を表現した作品を作り上げることができる。 <p>C → B</p> <ul style="list-style-type: none"> ・キーワードを考え、それに基づいて季節を感じさせる作品を作り上げることができる。

<p>3</p> <ul style="list-style-type: none"> グループの中で発表を行い、感想を伝え合う。 グループの中で一番よかった作品を選定する。 	<ul style="list-style-type: none"> グループの中で発表を行う際には、作品を音読させ、言葉の響きや流れも考えさせる。
<p>4</p> <ul style="list-style-type: none"> ロイロノートを用いて、グループごとに選定された作品を発表し、全体で共有する。 	<ul style="list-style-type: none"> 再びロイロノートを活用し、グループごとの作品を全体で共有しやすくする。
<p>5</p> <ul style="list-style-type: none"> 本時の振り返りを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 本時の振り返りを行い、自身の感じていることを文章にすることの難しさを確認させるとともに、その大切さを確認させる。

模擬授業は『枕草子』「春はあけぼの」の章段を読解した後の授業として想定されており、その授業の中心は「春はあけぼの」の書き出しを借りて、自分ならではの季節感を表す文章を書くというものである。こうした授業は従来型の授業でも行われているが、今回ICTを活用することによって、より効果的に授業が展開できる可能性が見えてきた。

例えば、文章作成に行き詰まっている生徒がいても、その生徒に対して歳時記を資料として個別に送ることができたり、生徒も季節のイメージをインターネットで検索することで、文章のヒントを得たりすることがICTを活用することで可能となった。また、学習のめあてや文例など、従来であれば板書やプリントを必要とする内容もすべてスクリーンに投影して見せることができるため、授業のテンポもよくなり、その分、生徒の学習に時間を多く配分することができるようになった。

しかし一方で、ICTを活用する際の問題点も明らかになってきた。今回、生徒全員から作文を提出させる場面があったが、提出しているかどうか、その一覧がスクリーンで見られるようになっていたため、提出できていない生徒が目立つことになってしまった。また、多くの情報がいっぺんに集まってくるため、集まった生徒の作文をどう授業につなげていくのか、その方法に苦慮した様子がかがえた。タブレット端末を使えば、全生徒の学習状況を一目で把握できるのはよいのだが、短時間で作文に批評を加えたり、その作文を利用して授業を展開していくことの難しさが垣間見えた。さらに、授業の途中ICT機器の不具合があり、いつまでも作文提出の情報が更新されないといったことも生じた。ICTの活用を前提とした授業であったため、他の手段で授業を進めることもできず、不具合を調整するまで授業が中断してしまっていたが、実際に授業

【資料 2-1】 教師役のデジタル資料

例文1

春は桜木。
さまざま色づき始める校庭、
桜の下にて、うち騒ぎたる生徒の
写真構えたる。

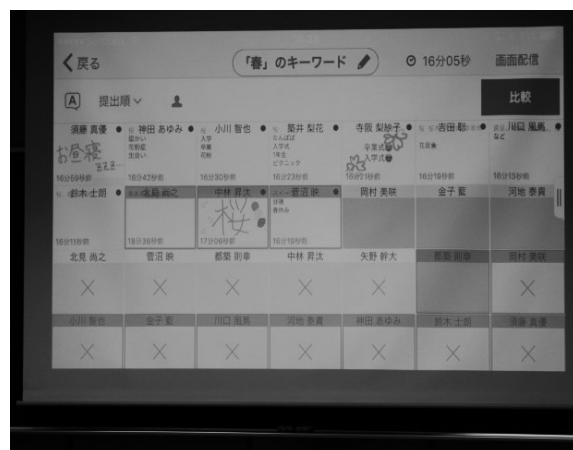
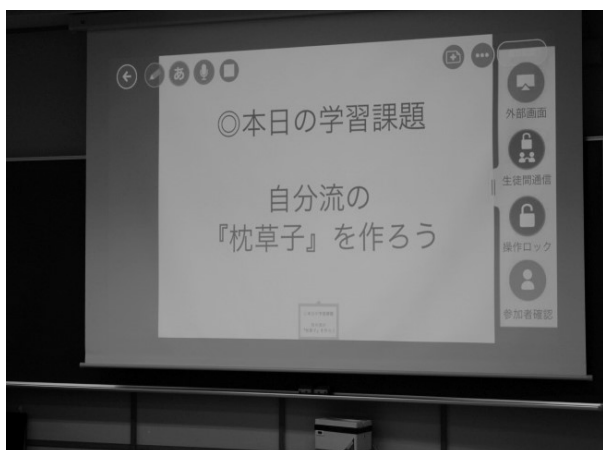
【資料 2-2】 生徒役のデジタル資料

夏は花火。
祭りの打ち上がるものは
さらなり。線香花火の消
え入りたるをながめ、人
の世の儂きを思うもいと
をかし。

を行うのであれば、ICT 機器が不具合を起こした際の対応策も常に準備しておく必要がある。

ICT の活用においてデメリットとして挙げられる ICT 機器の不具合というのは、今後も避けて通れない事柄であろう。しかし、ICT を活用することによって、従来型の授業より生徒個々の興味関心や理解に応じた指導が可能になるのは間違いない。また、教師の説明などが少なくなる分、生徒同士の話し合いや作文を行う時間を多く取ることができるため、ICT の活用によって従来型の授業以上に学びが促進される環境を作り出すことができる可能性が見られた模擬授業であった。

【資料 3】 模擬授業の様子



4 おわりに

ICT を活用した模擬授業は全 4 回行ったが、それぞれ前の授業の反省を生かしながら、新たな試みが行われた。例えば C グループの授業では、ティーム・ティーチングの形式を導入し、一人がタブレット端末の操作に専念し、もう一人が授業を展開するといった形で、教師の情報処理の問題を乗り越えるというアイデアが見られた。また、黒板やプリントなど従来からの授業スタイルをあまり変えずに、全員の回答が必要な

時だけ ICT を活用するという場面を限定した授業展開を行ったグループもあった。ICT の活用をメインにした授業は教師自身が目的や用途に合わせて ICT を使いこなせないと、従来の授業で行っていたことすら授業で扱えなくなる可能性がある。授業に ICT を導入するにあたっては、ICT を活用することが授業の展開において利点となりうる場面をまずは想定する必要がある。そして限定的に ICT を活用しながら、従来行ってきた授業に ICT を馴染ませていくことが、今後 ICT を活用させた授業を構想していくには現実的な方法であると考えられる。

また、ICT を活用しなければできない授業というのは、ICT 機器の不具合を考えた場合、現時点では常に危険を孕んでいると言える。ICT を活用した授業を構想するにあたっては、常に ICT 機器が不調になった場合の対応策を考えておく必要がある。授業の構想においては「ICT を活用した従来にない新しい授業を構想しよう」とするのではなく、「今ある授業に ICT を組み込むことで効果的な授業を展開しよう」という視点があれば、ICT 機器が不調になった時でも、従来の授業のやり方から対応策を練ることもできるだろう。

生徒が一人一台タブレット端末を持つ学校は今後ますます増えていくことが予想される。そうなれば、従来型の授業にはなかった学びから生徒は様々な力を身につけていくはずである。少なからず、ICT によって効率化された授業を受けた生徒は、従来型の授業しか受けられなかった生徒に比べて多くの可能性が見出されることになるだろう。そしてそれに伴い、今後は教師の専門的力量として ICT の活用能力も求められていくはずである。しかし、従来型の授業の方法を前提とした「国語科教育法」や教育実習の指導では、学生の ICT の活用能力を実際の授業を行える水準にまで引き上げることは難しい。国語科教育において ICT を活用するとどのような可能性が開けるのか。ICT の活用に関しては実践に基づいた研究の蓄積が今後も求められていくであろうが、その知見を踏まえた上で「国語科教育法」や教育実習の指導のあり方も変化させていく必要があるだろう。

(成城学園中学校高等学校 教諭／本学非常勤講師)

参考文献

- 野中潤 (2017)「教育 ICT と国語科教育の課題 (1)」『都留文科大学研究紀要』No85
野中潤 (2017)「国語科教育に ICT を導入する理由—『書くこと』の授業実践から—」『月刊国語教育研究』No542
藤森裕治 (2017)「教員養成学部における ICT 模擬授業の取り組み—コンピューター利用教育を通して—」『教育実践研究』No16

